

..... 文献紹介

最近のグノーシス研究

——文献を中心とする概観——

水 垣 渉

K. Rudolph によれば、F. C. Baur, A. v. Harnack, W. Bousset-R. Reitzenstein, H. Jonas らがそれぞれ一期を画した第二次世界大戦前のグノーシス研究は、1947年の *Nag-Hammadi Codices* (慣例により *NHC* と略記する) の発見を機に新しい段階——第五期——に入ったといわれる。それまでは異端反駁教父の著作を主要な資料として構成するほかはなかったグノーシス像が、大量の第一次資料の出土により全面的に再検討を迫られることになったばかりでなく、原資料に基づく本来のグノーシス像の究明が可能になったのである。この意味で *NHC* の発見は、研究史を従前とは質的に異なる段階に導いたといえることができる。

しかし *NHC* 全体の写真版の刊行、本文の校定・校勘の作業はいちじるしく遅れ、それらが一般の研究者に広く供されるようになったのは最近10年のことに属する。ギリシャ語やラテン語のようなよく知られた古典語ではなく、コプト語で書かれている *NHC* の原文の内容を通覧するには欠かすことのできない翻訳も、まとまったものは1977年ようやく公刊されたばかりである。それゆえ、60年代に緒についた新しいグノーシス研究は、ほぼ同じ時期に発見されながらすでに研究の収穫期を終えつつある死海文書の場合とはことなり、現在百花繚乱の季節を迎えており、それは今後も続くものと思われる。国際的、学際的に陸続と発表される論文の目録を一瞥するだけでも、現在の研究状況がいかに多彩で流動変化に富むかが知られよう。教父研究の視点からグノーシスに関心を寄せてはいるが——それゆえ古い型のグノーシス研究者に属する——、専門家ならぬ筆者にとっては、本文の整定といった基礎的な文献学的作業からはじまって、複雑な宗教史的思想的連関の解明にいたる広範なグノーシス研究の最前線を臨場感豊かに報告することも、また問題の全般にわ

たって問題点を整理、把握することも不可能に近い。

そこで本稿の課題を、主として最近10年間のグノーシス研究の概略を文献の面から整理して、一つの基本的な手引きを提供することに限定しなければならない。それゆえ本稿は、グノーシス研究への手引きではなく、その手引きの手引きにとどまる。論述の重点は全体的、基本的文献の紹介に置き、個別問題については、隣接領域との関連を考慮しつつ若干の問題点にふれるにとどめる。

以下 I. 概説, 文献目録, 研究史, 学会報告, 論文集, 叢書

II. 本文, 翻訳

III. 若干の個別的問題

の順序で述べることにする。言及する文献は二度目からは番号によって引用する。

I. 概説, 文献目録, 研究史, 学会報告, 論文集, 叢書

NHC 発見以後の新しいグノーシス研究が現出した複雑多岐にわたる状況を見渡すには、新しい信頼しうる概説書がぜひとも必要である。これに應えるのが (1) K. Rudolph, *Die Gnosis. Wesen und Geschichte einer spätantiken Religion*, 1977 である。NHC 発見以前の資料、研究史、NHC の意義、グノーシスの本質と構造、歴史、影響について適確な概観を与えている本書は、すでに標準的著作の声価が高い。著者 Rudolph はマンダ教に関する重要な業績で知られるが (2) *Die Mandäer I. Prolegomena: Das Mandäerproblem*, 1960; *II. Der Kult*, 1961. (3) *Theogonie. Kosmogonie und Anthropogonie in den Mandäischen Schriften*, 1965), 後にあげる (19) 詳細な研究報告からしても、この種の叙述をなしうる最適任者の一人であるといえる。マニ教やマンダ教にも触れ、多くの図版、年表、文献目録を備えている本書はグノーシス研究入門書として随一のものであって、実際これに匹敵する概説書は他にない。(4) H. Jonas, *The Gnostic Religion*, 1958, 1972⁴ も思想についてすぐれているが、(1)のような包括的総合的な叙述ではない。さらに、新しい興味をそそる一般向きの読物としては、(5) E. Pagels, *The Gnostic Gospels*, 1980 の序論があげられる。研究史が最新の時点まで簡潔に紹介されている。著者は若い世代のグノーシス研究者で、すでに (6) *The Johannine Gospel in Gnostic Exegesis*, 1973, (7) *The Gnostic Paul: Gnostic Exegesis of the Pau-*

line Letters, 1975 の著作がある。宗教史の観点からの概説は、(8) S. Giversen, "Der Gnostizismus und die Mysterienreligionen" in: *Handbuch der Religionsgeschichte III*, 1975 に見出される。

文献目録は、まず分野毎に精選されたものにつくのが適当であろう。それには(1)をまず参照すべきである。(1)より古いのが、(9) R. Haardt, *Die Gnosis. Wesen und Zeugnisse*, 1967 の文献目録には12世紀までのグノーシスに関する二次的資料と各種事典のグノーシス関連項目があげられており、(1)を補うものとして有益である。NHC についての包括的文献目録は約4000点を収載する (10) D. M. Scholer, *Nag Hammadi Bibliography 1948—1969*, (=M. Krause et al. (ed.), *Nag Hammadi Studies [NHS と略記] I*), 1971 と、同年以後雑誌 *Novum Testamentum* にのせられている (11) *Bibliographia Gnostica* とである。(12) G. Friedrich (ed.), *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament, Supplementband X/2*, 1979 の《*γνώσκω, γνῶσις κτλ.*》についての新文献の補遺も見逃せない。邦語には、(13) 荒井献, 『原始キリスト教とグノーシス主義』, 1971の引用文献表がある。同氏のほかには邦語のグノーシス文献は乏しい。(14)日本基督教学会の年報『日本の神学』の会員業績表などが参考とされよう。

概説の域より一步深く進むためには、研究史、とくに近年の研究状況についての知識が欠かせない。簡単には(1)で得ることができるが、最も重要なのは同じく Rudolph の *Theologische Rundschau* 誌に数次にわたって載せられた (15) "Gnosis und Gnostizismus, ein Forschungsbericht" (*TR* 34(1969), 121—175, 181—231, 358—361; 36 (1971), 1—61, 89—124; 37 (1972), 289—360; 38 (1973), 1—25) である。合計 300 ページを越え、優に一冊の書物を成すこの研究報告は、問題別、分野別の文献目録として、各分野を網羅する研究史として、また個々の議論に立入った見事な学説史的整理と批判的検討として、それ自体がグノーシス研究への重要な寄与であり、専門的研究には必須の文献である。いずれの問題についてもまず参照に値するが、ことに II. Allgemeine Probleme (Wesen, Ursprung, Geschichte) は読んで興味深い。単なる回顧につきない本報告の議論の整理と問題点の指摘とは、今後の展望をひらき指標を与える点で、研究史の叙述としてのみならず、研究の方法論として読まれる価値をもつ。Baur 以来の代表的な論文を一本にまとめて研究

史を跡づけることを可能にしているのは、Rudolph の編集になる ⑩ *Gnosis und Gnostizismus, (Wege der Forschung 262)*, 1975 である。Baur から H. J. Drijvers にいたる31篇の論文が集められている。同じ叢書に ⑪ G. Widengren (ed.), *Der Manichäismus, (Wege der Forschung 168)*, 1977 もある。さらに、各種の論文集には、その時点での各分野における最新の研究状況を前提した論稿や研究史的叙述を見出すことができる。そのようなものとして ⑫ B. Aland (ed.), *Gnosis. Festschrift für Hans Jonas*, 1978 がまずあげられる。マンダ教の研究史に関しては Rudolph の “Der Mandäismus in der neueren Gnosisforschung”, マニ教については Widengren の “Der Manichäismus. Kurzgefaßte Geschichte der Problemforschung”, 中世へのグノーシスの影響については、G. F. Gasparro, “Sur l'Histoire des Influences du Gnosticisme” が新しい知見を提供している。グノーシス研究の各分野について最新の研究水準を知るには本書に如くものはない。グノーシスと密儀宗教については ⑬ G. Quispel, “Gnosis und hellenistische Mysterienreligionen”, in: U. Mann (ed.), *Theologie und Religionswissenschaft*, 1973 が独自の主張を織り込んだ概観を与えてくれる。なおここに Jonas の ⑭ “A Retrospective View”, in: *Proceedings of the International Colloquium on Gnosticism, Stockholm August 20—25, 1973*, Stockholm 1977 をつけ加えておく。

学会報告としては、1966年メッシーナで開催されたグノーシス主義の起源に関する国際コロキウム(⑮)の報告が重要である。⑯ U. Bianchi (ed.). *Le Origini dello Gnosticismo. Colloquio di Messina 13—18 Aprile 1966*, Leiden 1967, 1970²。また ⑰ *Proceedings of the International Conference on Gnosticism at Yale University, March 1978*, Leiden 1979 がある。オックスフォード大学で四年毎に開催されている国際教父学会議の報告論文のいくつかは、⑱ *Texte und Untersuchungen zur Geschichte der altchristlichen Literatur (=TU)* の *Studia Patristica* の各巻に収録されている。また同7回会議におけるグノーシスに関する主要な研究発表は、⑲ M. Krause (ed.), *Gnosis and Gnosticism (=NHS 8)*, 1977 に収められている。これについては、⑳ 荒井献「第7回国際教父学会議に出席して——第一部会「グノーシス主義」を中心に——」『宗教研究』229(1976)と題する報告もある。さらに ㉑ *Proceedings: Quebec Colloquium on the Texts of the*

Nag Hammadi, 1979 もある。

一定の主題のもとに幾人かの研究者が寄稿している論文集として重要なのは、㉑ W. Eltester(ed.), *Christentum und Gnosis*, 1969, ㉒ K.-W. Tröger(ed.), *Gnosis und Neues Testament. Studien aus Religionswissenschaft und Theologie*, 1973 である。新しくは ㉓ E. P. Sanders(ed.), *Jewish and Christian Self-Definition I: The Shaping of Christianity in the Second and Third Centuries*, 1980 に、G. W. MacRae, J. E. Ménard, B. A. Pearson など著名なグノーシス研究者による興味ある論文が見出される。㉔ B. Layton (ed.), *The Rediscovery of Gnosticism I*, 1979 もあげられる。

NHC 発見以来グノーシス研究を推進してきた人人で、今では大家と目される学者の個人論文集の刊行も目につく。㉕ A. Böhlig, *Mysterion und Wahrheit. Gesammelte Beiträge zur spätantiken Religionsgeschichte*, 1968, ㉖ G. Quispel, *Gnostic Studies I*, 1974, *II*, 1975, ㉗ H.-C. Puech, *En quête de la Gnose I. Gnose et le temps* (同名の有名な論文を含む), *II. Sur l'évangile selon Thomas*, 1978, ㉘ U. Bianchi, *Selected Essays on Gnosticism, Dualism and Mysticism*, 1978 がそれである。㉙ H. Jonas, *Philosophical Essays*, 1974 も見落せない。さきに述べた意味とは異なるが、㉚ H. Langerbeck, *Aufsätze zur Gnosis*, 1967 と、ヘレニズム宗教史の大家の論文集、㉛ Z. Stewart (ed.), *Arthur Darby Nock: Essays on Religion and the Ancient World I, II*, 1972 とをつけ加えておく。これらのうちで Quispel, Puech, Jonas, Nock など広範な視野に立ってグノーシスを論じている諸家の見解は、グノーシス研究を専門としないものにも刺激と興味をよびおこすであろう。

祝賀論文集としては、Widengren の ㉜ J. Bergmann et al. (ed.), *Ex Orbe Religionum. Studia Geo Widengren oblata*, 1972, Böhlig の ㉝ M. Krause (ed.), *Essays on the Nag Hammadi Texts in honour of A. Böhlig*, (=NHS 3), 1972, Labib の ㉞ M. Krause (ed.), *Essays on the Nag Hammadi Texts in honour of Pahor Labib*, (=NHS 6), 1975 がある。Jonas の祝賀論文集㉟は前にあげた。㊱ J. Neusner (ed.), *Christianity, Judaism and Other Greco-Roman Cults. Studies for M. Smith IV*, 1975 もここに付け加えておく。

叢書としては、かなりの速度で巻数を増し加えつつある *NHS* がグノーシス研究の拠点として重きをなしている。

II. 本文, 翻訳

NHC 発見の事情, 公刊にいたるまでの経緯は, (1), (5), (42) J. M. Robinson (ed.), *The Nag Hammadi Library*, 1977 で知ることができる。とくに(1)は地図や写真を添えているので興味深く, また各文書の年代決定や集成の意図を知る一つの手掛りとなる出土状態にも触れている。さらに詳しくは(49)所収の M. Krause, “Die Texte von Nag Hammadi” と, (43) J. Dart, *The Laughing Saviour*, 1976 とが参照される。

NHC は13のコーデックスから成り, 全部で53の文書を含んでいる。元来は1257ページに及んだといわれるが, 発見後失われた部分があり, 残るのは1153ページである。13のコーデックスの含む文書の表題は(42)に, 簡単な説明付きの概観は(1)に, より詳細な説明は(49)の21~76ページに見出される。

NHC の本文について基本的資料は (44) *The Facsimile Edition of the Nag Hammadi Codices*. Published under the Auspices of the Department of the Antiquities of the Arab Republic of Egypt in Conjunction with the UNESCO, 1972—1977, 10 vols. である。これには序論の巻が予定されている。*NHS* には, (45) *The Coptic Gnostic Library*, edited with English Translation, Introduction and Notes published under the Auspices of the Institute for Antiquity and Christianity の11巻のシリーズが含まれることになっており, 現在刊行の途上にある。*NHC* のうち最も早く研究の手がつけられたのは *Evangelium Veritatis* であり, すでに1956年に本文, 写真, 仏独英訳を含むフォリオの豪華本が出版されている。これと同じ体裁でいくつかの文書 (*De Resurrectione*, *Epistula Jacobi Apocrypha*, *Tractatus Tripartitus*) が刊行されているが, きわめて高価である。その他の個別の本文については, 前出の Krause 論文を参照されたい。

翻訳でグノーシスの全体像を把握するのに便利な書物は, (9)の Haardt である。まず, 古典的グノーシス研究の主要資料であった教父からのテキストをグノーシス各派ごとに紹介し, 「真珠の歌」や「ポイマンドレス」, プロティノスのグノーシス

反駁論、さらに *NHC* の一部も加え、マニ教、マンダ教関係のテキストに及んでいる。本書には英訳もある (1971)。Haardt を大規模にしたものが、叢書 *Die Bibliothek der Alten Welt* におさめられた (46) C. Andresen (ed.), *Die Gnosis* 三巻である。第一巻は教父の証言 (W. Foerster ら, 1969), 第二巻はコプト語資料とマンダ教資料 (Krause, Rudolph ら, 1971), および一、二巻の索引を含む。この索引は、グノーシスの諸概念、聖書その他の引用箇所、翻訳された箇所についての索引から成り、利用価値の高いものである。遅れて1979年に出た第三巻はマニ教にあてられている (Böhlig ら)。

NHC 全訳の試みは、まず J. M. Robinson を Director とする The Coptic Gnostic Library Project of the Institute for Antiquity and Christianity. Claremont/California のメンバーによって達成された。前出 (42) *The Nag Hammadi Library in English* がそれである。これによって *NHC* の全体がはじめて一般の読書界に提供されたことになる。独訳の試みは、H. -M. Schenke を中心とする東独の研究グループによってなされており、雑誌 *Theologische Literaturzeitung* (=ThLZ) に随時発表されている。仏訳は、J. -E. Ménard を中心とする Laval, Strasbourg 両大学のグループによって進められている。これらの事情、および個々の翻訳については、前出 Krause 論文を参照されたい。ともかく新発見の *NHC* を含めて既知のグノーシスのテキストは現在、ほとんどすべて翻訳で読むことができるようになったわけである。勿論、本文の読み方に疑義の存する場合も少なくなく、解釈も学者によって岐れるから、一つの翻訳に依存することはできない。標準訳はなお今後期待される。

III. 若干の個別的問題

あるいはヒュドラ (Irenaeus), あるいは七彩変化のシャボン玉 (H. v. Schubert) に喩えられ、また手はエサウ、声はヤコブと評される (Harnack) グノーシスの実態を把握することは至難のわざである。グノーシスに関する見解も千変万化であることは不思議ではない。しかし、*NHC* の研究およびそれに刺激された隣接領域の研究の進展に伴い、グノーシスの本質については諸家の見解が一致する部分が出てきたように見受けられる。これにたいしてグノーシスの歴史的起源、歴史的発展に

については、依然として諸説紛紛、定説を見ない。グノーシス思想そのものが、歴史に関心を示さず、時間の範疇よりは空間の範疇によって思惟し (Bultmann)、文献成立の時代や状況を確定する手掛りをほとんど文書のうちにとどめていないからである、たとえば *NHC* にしても、そこに含まれている文書は概して2~3世紀にかなり広範囲の場所で成立したと考えられるが、個々の文書についてこれを具体的に確定することはきわめて難しい。また1世紀の確実な第一次資料がほとんど存在しないことは、グノーシスの起源についての判断を困難にしている。しばしば議論の的になったキリスト教以前のグノーシスの存在も、たとえば紀元30年より何年前といった精度で論ずることは不可能である。このような事情から、文書の成立年代、成立場所の決定を基礎にしてグノーシスの歴史的發展を辿ることは仮説の域を出にくい。可能なのは、資料分析、様式史、伝承史、類型の比較などの文学的文献学的方法である。グノーシス研究においてつねに主流を占めてきた宗教史的方法もこのような文学的文献学的方法に依存するところが大きいのである。このように文学的文献学的方法を宗教史的方法と結びつけることによって原始キリスト教とグノーシスの歴史像を構成しようとする野心的な企てが、(47) H. Köster-J. M. Robinson, *Entwicklungslinien durch die Welt des frühen Christentums*, 1971, 同英語版 *Trajectories through Early Christianity*, 1971 である。このような方法論にたいする批判は、たとえば M. Hengel の諸著作に見出される。(48) *Der Sohn Gottes*, 1975 (53ページ), (49) *Juden, Griechen und Barbaren*, 1976 (141ページ)。ともかくグノーシス研究の方法論の問題は、グノーシスの起源や本質の問題に直結しているのであり、つねに反省されねばならない。これに関連して (50) H. A. Green, "Gnosis and Gnosticism: A Study in Methodology", *Numen* 24 (1977) があげられる。グノーシスの研究が歴史的通時的によりも、むしろ共時的に遂行することを容易にする事情は上に述べた理由によるが、この点で Jonas の (51) *Gnosis und spätantiker Geist I: Die mythologische Gnosis*, 1924, 1964³, II/1: *Von der Mythologie zur mythischen Philosophie*, 1954, 1966² と、Quispel の (52) *Gnosis als Weltreligion*, 1951 とは方法論の見地からも依然として重要な意義をもつであろう。

多様なグノーシス主義として現象したグノーシスの本質については、Bianchi の

“l'idée de la connaissance (salvatrice) par connaturalité congénitale avec le divin” (2)3 ページ), 『究極的存在と人間の本来的自己との本質的同一性(Konsubstanzialität)の認識』(荒井 (1) 350 ページ) などの定義に大きな異論は出ないであろう。そしてこの定義に含まれている諸要素間の関係一構造一がいろいろに説明されるわけである ((1)もこの点の説明に最も多くのページをさいている。さらに (3)A. Böhlig, “Zur Struktur gnostischen Denkens”, *New Testament Studies* 24(1978) 参照)。しかしここには二つの問題があると考えられる。一つは《γνώσις》(訳すとなれば「覚知」あるいは「覚」がよいであろう) それ自体がいかなる認識, 知であるのか, という問題である。これを明らかにするためには, キリスト教的信 (πίστις) や哲学的思惟 (ἐπιστήμη, νόσος) との関係を問わねばならないが, 現在の専門的なグノーシス研究においては, このような形の問題提起は残念ながらあまり見られない。順序として文献学的歴史学的研究が重んじられねばならないからである。しかし教父でもプロティノスでも, 究極の関心はグノーシスの本質理解にあるわけであり, 歴史的問題としても本質理解への問を避けてとおることはできない。これに関しては (1) 所収の B. Aland, “Gnosis und Kirchenväter” の 4. Der Glaubensbegriff が参考になる。グノーシスの特徴ということであれば, 専門家非専門家を問わず, 多くの見解が提出されている。(新しくはやはり (1) に載せられている (4) U. Bianchi, “Le Gnosticisme : Concept, Terminologie, Origines, Délimitation” が参照される)。たとえば, 方法的, 漸進的的な哲学的思惟にたいしては, グノーシス的思惟は《simul-totum》という特徴をもつといわれ (4) I, 7 ページ参照), 自己の変革 (transformation) に立脚するキリスト教にたいしては, グノーシスの立場は自己の覚-実現 (realization) を特徴とするといわれたりする (5) G. W. H. Lampe, *God as Spirit*, 1977, 17 ページ参照)。こういった, グノーシスの定義や特徴づけに関する古今東西の諸説を集めてみることもあながち徒勞とはいえないであろう。おそらくそのいずれにもいくばくかの真理が含まれていよう。このような事実からも, 第二に, グノーシスの本質と現象との関係, グノーシスの統一性と多様性との関係, いいかえるとグノーシスとグノーシス主義との関係が問題になる。これについても (6) (7) の解釈を越えるものは見当たらないように思われる。要するにグノーシスについての上述の二つの本質問題は, 現在のところ専門家

の間では組織的に論じられていないように見える。むしろ非専門家の中で、したがってより広い文脈で、グノーシスと神話論、グノーシスと神秘主義といった題目がしばしば取上げられている。ことに前者は、グノーシスが宗教哲学であるか神話論であるか、とくに二世紀のグノーシス主義が神話論の哲学化であるか、哲学の神話論への頹落であるかといった形で研究史の初期から論じられてきている（近くは 6434 ページ参照）。ここには非専門家の二つの著作をあげておく。66 M. Buber, “Christus, Chassidismus, Gnosis”, in : *Werke III*, 1963, 67 P. Ricoeur, *Finitude et Culpabilité II : La Symbolique du Mal*, 1960.

グノーシス主義の多様性は、その史的連関の多様性にも由るから、グノーシス主義とユダヤ教（とくに周辺のユダヤ教 (Randjudentum), あるいは新約聖書, あるいはギリシア思想（とくにプラトニズム）あるいは密儀宗教との関係が論じられる。ことにユダヤ教や新約聖書との関係は、グノーシス主義の起源の解明に結びつくものとして、研究の一つの焦点になっている。これについては18所収の諸論文を指示しておくにとどめる。プラトニズムとの関係についても研究は少なくない。神的根源的一と現象界の多との関係（それゆえまた神と悪との関係）を問うことを有力な動機としているグノーシス主義が、古代後期の諸思想と連関をもち、とりわけプラトニズムに親近的であることは当然である。事実グノーシス主義にたいして単なる反駁でなく、多少とも実質的な思想的交渉に入った、すなわちグノーシス主義の本質理解を目ざしたのは、キリスト教では Clemens Alexandrinus, Origenes, 哲学では Plotinus など、プラトニズムと有縁の人人であった。この問題については、Rudolph の 19 TR 38(1973), 12~25ページと 18 所収の A. H. Armstrong, “Gnosis and Greek Philosophy” を手引きとしてあげておく。モノグラフィーとしては 68 C. Elsas, *Neuplatonische und gnostische Weltabkehrung in der Schule Plotins*, 1975, 邦語論文として69柴田有, 「プラトン主義とグノーシス——二つの二元論」『現代思想』(1979年1月)だけをあげておく。しかしこの問題に関しては、グノーシスにたいするギリシア哲学のありうべき影響を評価する時期に未だ至っておらず、したがって両者の関係はきわめて慎重に取扱われねばならないとする Armstrong の前掲論文の結論が、尊重されねばならないであろう。